

これからも普及員と共に

鳥取県果樹研究同志会会長 寺地 政明

三十歳で脱サラし梨づくりの道へ。当時は今と違って就農者を支援する制度も乏しく親元で、ともすればかなり偏った考えの中で言われるがまま淡々と作業していたように感じる。

いつかは他の職業に就くだろうと思いつつ、春先から連続性のある「梨づくり」という風土に埋没していたのを思い出す。

梨づくりから抜けられないと感じた三十二歳の時に農業簿記と出会い、記帳し決算をしていく中で、現状のままでは苦しいことに気づき規模拡大や品種構成、ハウス栽培などを模索した。



同志会活動でのスキルアップや営農指導員（農協職員）とのかかわりが大きかったが、その頃に「普及員」の存在を知った。以降、現在まで何かとお世話になり続けている。今となって思い出すのは、農業簿記である。

当時は手書きだったので夜遅くまでお付き合いいただいて指導を受けていた。一度ツボにはまるとなかなか間違いがわからなくなるのが手書きであるが、間違いを見つけた時の満面の笑み。時計は日付変更線をとっくに超えてはいたが真剣そのものだった。今では考えられないことである。

やがてパソコン簿記の時代に移行していくが、私は個人的にソフトを利用して記帳していたが、普及員は鳥取県が開発中のソフト「アボット」を強力に推進していた。

自分が取り組んでいるのがベストであるという自信から、半分喧嘩腰になりながらも熱く意見を戦わせて「アボット」に勝利したのは我ながら気持ち良かったのを覚えている。そのソフトは今や多くの人に利用され信頼性のある「ソリマチ簿記ソフト」である。

また、二十世紀梨の黒斑病撲滅運動。クリーン作戦と病斑の完全封じ込めと効果的防除方法の徹底した熱い指導も忘れることはできない。今やゴールド系が多くなったが、当時の指導と実践は産地の勢いでもあった。

さらには、二十世紀梨のハウス栽培に取り組んだ際も、当時としては明確な栽培指針もなく農協の営農指導員も手探りの状態の中、温度は上げすぎない事、夜間の保温に努める事、早朝換気、霜対策など事あるごとに圃場に足を運んでアドバイス頂いたのは大きな安心となった。落花期に霜に遭遇し幼果がケロイド状になり出荷不能になった際の励ましの言葉と後の簡易加温機の導入の事業に結びついたのも普及員のかかわりだと思っている。

「普及員」は我々に直接接して技術の指導や経営相談は勿論のこと、補助事業など我々に深く関係する情報を提供することで安定した農家経営と産地を支える為に幅広い仕事を受け持っていることを実感する。垣間見る普及員に、「地域振興」をサポートする姿が見える。